諶容『マイナス十歳』

――中国文芸界の新しい動き――

阿頼耶　順宏

一

時計の振り子の音がひびく。遠くから「いい知らせだぞ！」「グッド・ニュースよ！」と叫ぶ男女の声が聞こえ、その叫びはしだいに近く大きくなる。

電話が鳴る。

「部長、いい知らせがあります！」

「なにをそんなに興奮してるのかね？」

「近いうちに、みんなの年齢を十歳引き下げるという公文書が出されるそうですよ。」

「そのニュースの出所はＡＰかね、それともタス通信かい？」

「なんでも、特別調査委員会が作られて、二年三か月もかかって詳細な検討を加えた結果、公文書の草案ができたそうです。……文化革命で誰もが人生の貴重な十年を無駄にしたので、各自の年齢から十歳をさし引くべきだ、というものです。……

人びとの声が大きくなる。

――「ねえ、聞いた、聞いた？　みんなの齢を十年さし引いてくれるんだって」「そうなんだよ、みんな十歳若くなるんだぞ！」「マイナス十歳！」「十歳！十歳！」……

今年（一九八八年）二月二十七日、ＮＨＫＦＭ放送では、海外ラジオドラマ特集第四夜として、諶容原作、王芝夫脚色演出、北京の中央人民ラジオ放送局文芸部制作の『マイナス十歳』（原名『減去十歳』）を放送した。このドラマは中国では八七年四月に放送され、同年の第十回ベルリン未来賞ラジオドラマ部門でグランプリをとった作品であった。(1)

日本での放送台本の翻訳は中井多津夫、出演は久米明、津田京子、丹阿弥谷津子、河原崎長一郎、樫山文枝、赤座美代子らの諸氏で、解説を加えて一時間番組として放送された。

NHKから依頼を受けてこのラジオドラマの解説を引受けたわたしは、まずこの作品の背景になっている中国の文化革命について、次のように述べた。

これから聞くドラマの背景にある中国の文化革命は、当時は「文化大革命」と呼ばれていましたが、今では「文化革命」とか「文革」、または「十年の動乱の時期」などと呼ばれています。一九六六年から始まって七六年十月にいわゆる「四人組」――江青、張春橋、王洪文、姚文元ら――が失脚するまでの、約十年間にわたった思想、文化の革命をめざす大規模な政治運動でした。紅衛兵と呼ばれた若い学生を中心とする集団が、過激な実力行動をおこないました。

当時この運動は、党や政府部内などにいる修正主義者をとりのぞき、封建主義的、資本主義的な考え方を一掃するための粛正運動であると、そういうふうにいわれていましたが、現在では、毛沢東主席が誤って発動したもので、それが林彪や「四人組」に利用され、大変な災難をもたらした内乱であった、と完全に否定されています。(2)

文革の時期に、知識階級の人びとは、思想改造の名のもとに、農村に追われて働かされたり、さまざまな迫害を受けたために、中には発狂したり自殺したりする人もありました。文芸界でも有名な作家の老舎（ラオシェー）、趙樹理（チャオシュリー）をはじめとして、多くの人びとが不幸な最後をとげました。

大学その他の教育、研究機関もほとんど閉鎖されていた文革の十年間の空白は、今世紀末までに農業・工業・国防・科学技術を近代化しようとするいわゆる「四つの現代化」にも、大きな障害となっています。

……

二

このラジオドラマの原作は、八六年第二期の雑誌『人民文学』に発表された同名の短編小説で、人びとの胸に今も重くのしかかっている文革後遺症というべき諸問題を、明るくユーモラスなタッチで描いていて評判となり、ほかのいくつかの雑誌にも転載されたものである。

作者の諶容（シンヨウ）（中国読みではチェンルンChen Rong）は本名を陳徳容（チェンドルン）といい、本籍は四川省巫山（ふざん）県、一九三六年に湖北省武昌で生まれた。父親は国民党政府の高等法院、最高法院の院長であったというから、さしずめ日本なら

最高裁判所裁判長というところだが、これは革命後の中国では彼女を好ましからぬ階層と規定されることになる。日中戦争が始まったのは彼女が満一歳になる前のことで、一家は成都、北京、重慶等の地を転々とする。

中華人民共和国成立後、父親が追放されたこともあって、自活を決意した諶容は、十六歳で西南工人出版社にはいり、小売部の販売員となり、翌年、西南工人日報社に移ると、独学で中学高校の課程を学習し、ロシア語も始める。十九歳で北京ロシア語専科学校に入学、卒業後は中央人民放送局に勤めた。六三年にはロシア語教員にもなったが、病気でやめてからは、山西省や河南省にも行っている。やがて文革が始まると、六九年から北京郊外の通県で農作業に従事しながら、長編小説を書き始める。

農村での闘争を描いた長編『万年青』（七五年）や『光明と暗黒』（原名『光明与黒暗』、七八年）などを発表したが、彼女が全国的に有名になったのは、八〇年一月、文芸雑誌『収穫』に発表した中編小説『人、中年に到る』（原名『人到中年』）によってであった。この作品は翌年の第一回優秀中編小説コンクールに入賞し、さらに八二年に長春映画製作所で映画化されたとき、諶容自身が脚本を担当したが、この映画も八三年の金鶏賞、百花賞という中国映画の最優秀作品賞を受賞し、主演の潘虹（パンホン）も最優秀女優賞を受けた。

諶容の代表作とされる『人、中年に到る』は、陸文婷（ルークェンティン）という四十二歳の眼科の女医が主人公である。一九七九年のこととなっているから、文革も終わって三年後の北京の病院で、陸文婷は朝から続けざまに三つも手術をやったあと、過労のため急性の心筋梗塞で倒れる。生死の境をさまよいながら、朦朧とした彼女の意識のなかで、回想の場面が展開していく。

大学を卒業して病院に配属されてきたばかりの陸文婷は希望にもえる若い眼科医で、患者であった技術者の傅（フー）家傑（ちゃちえ）と恋愛し、結婚する。やがて男の子と女の子が生まれ、彼女は病院でのしごとのほか、家事、育児に追われることになるが、夫も献身的に彼女を助けようとする。医師と技術者という知識階級の家庭でありながら、経済的には苦しく、家も狭く、文化革命が始まると貴重な研究の時間まで奪われる。

文革が終わっても、生活条件はいっこうによくならない。小学生の男の子と、托児所にあずけてある女の子、冶金研究所につとめる夫との四人家族が、わずか十二平

方メートルひと間の暮らしである。しかも、中年になった彼女たちは、仕事が忙しくなるばかり、下の女の子が病気になっても十分な看病がしてやれず、いらいらして男の子にあたったりする。彼女の月給は五十六元五角、男の子のズック靴は破れている。

同僚の医師、劉夫妻が訪ねてくる。二人は父親のいるカナダに移住しようとしている。中年の知識人が恵まれない状況にあることを自嘲気味にこぼすこのときのことば、「人、中年に到れば万事休す、というが、今は万事忙しいばかりだ」――から、この題名がつけられている。

献身的に人びとのための医療に従事した中年の女医が、経済的に恵まれぬ状態のままであり、しかも過労で倒れてしまうというこの作品は、現代中国の、いっこうに進まぬ改革と、知識階級の現状を告発して、大きな反響をまきおこした。祖国を愛しながらも、出国の道をえらぶ同僚夫婦を登場させたことも、発表後さまざまの議論を呼び、彼女を批判する声も多かったが、こうした現実を作品に勇敢にとりあげた謹容を支持する人びとの力も結集される結果となり、文革後の新しい時期の文学を代表するすぐれた作品とする評価は動かぬものとなった。

三

『マイナス十歳』というラジオドラマは、人びとが口々に叫ぶ「いい知らせだ！」（「好消息！」）から始まるが、中国では、上の方で秘密にしていることがこうした口コミ（小道消息）で、あっという間に広がる、ということが、これまでにもよくあった。しかも、そのうわさが人びとに信じこまれていくのは、公文書による発表、お上からのお達しという権威づけがあった――という設定になっている。ルーマニア風の家具を買いたいという部長は、一方では、もっと若いやつを登用してやらなければ、とはりきっている。行政組織での若返りも、たびたび掛け声だけはかかるのだが、硬直した古い体質のために実現が遅れている問題である。

ラジオドラマのほうでは息子のへやから西洋音楽らしいものが聞こえてくるようにしているが、これもラジカセといったものが普及した現代中国の都市の状況であろうし、若返ったらさっそく、外国製の服を買おうという夫と、高級美容院で髪を染めたいという妻、そして観光旅行に出かけようというのも、現代の中国の人びとの願いそのものといえよう。そうしたことは実現可能となっており、もはやかつてのように批判されるおそれもなく

なったのである。

ドレスアップのごたごたから、夫婦げんかが始まり、離婚にまで行ってしまいそうな夫婦も登場する。女性が経済力をもち、意識もかわってきた中国では、離婚も大きな社会問題となっている。

原作の小説は、以前にはみられなかったユーモラスな皮肉たっぷりの文章で、こうしたうっとうしい問題を軽くさばいているのが特色だが、このあたりを一部訳出してみる。十歳マイナスになると聞いて喜んだ三十九歳の鄭(チョン)鎮海(チェンハイ)が自転車で家に帰る。十歳の息子も遊びに行っており、奥さんもいない。

自分で作った小さいソファーは比率をまちがえた。座ると背もたれはみじかく、ひじかけが低いのに、座席は高い。腕をおいても落つかないばかりか、ひどく疲れる。みんなあいつが、よその家にソファーがあるのを見てうらやましがり、買う金がなくてどうしても自分で作れといったからだ。ケチなやつ！　実際、どこもかしこもこんなソファーを並べてるが、幹部服と同じで、うっとうしいこと！　プチブルめ。

本当に、あのとき、どうしてあんなのをみつけたのか。あの家の連中ときたら、しゃべることは食うもの着るもの、給料と臨時収入のことばかり、低俗きわまる。家風が一ばん大事だ。あいつはおふくろと瓜二つ、しゃべり方は荒っぽいし、ひとり子どもを生んだらもう桶みたいに太りやがって。顔も、からだも、性格もひどい。ああ、あんなやつをどうしてみつけたんだろう！

ああ！　あのころはむやみにあせってた。もうすぐ三十という年になろうというのにひとり暮らし、飢えたるものは食をえらばずで、えり好みなどしていられなかった。今度、十歳マイナスになりゃ、まだ二十九だ！　まじめにこの問題を考えなきゃならん。昨日、ちょっとよいタバコを買ったというだけで、あいつはわめいたり跳んだり、暮らしていけなくなるから、離婚したいとおどしやがった。離婚だって？　別れるなら別れよう！　二十九の青年は、相手をさがすにはぴったりの年齢だ。すぐにピチピチギャルがみつかるさ。二十二、三の大学卒業したばかり、おとなしく上品で、しかも新人類！　大学生には大学生、あいつなんか専門学校出の半人前！　本当につまらんことをしてしまった。……

――一方、奥さんのほうは、しごとがひけるとまっすぐ婦人服の店にかけこんだのだった。

十歳マイナス、月娟（ユエチュエン）は興奮して大はしゃぎ、とんでもないことを考えた。もう一年で四十になろうという女が、突然二十九歳の若い女性に逆もどりとは、彼女にとって、まことに降ってわいた喜び、この世のどんな値うちのある物でも量れぬ宝物！

二十九歳、なんという若さ、なんというすばらしさ！　彼女はうつむいて、地味で人眼もひかぬ年寄りじみた服装をみると、哀れでむしょうに腹が立つ。店にとびこみ、バタバタと流行服の展示即売場に馳けつけると、掛かっているまぶしいばかりのワンピースを一着一着、眼を皿にしてレーダーのようににらみまわす。ふと、白いレースのフリルをした真っ赤なワンピースが眼につく。女性の売り子にとってもらって試してみる。若い売り子は彼女をじろじろながめたが、顔にはおだやかな表情はいささかもなく、冷やかな石で作った彫刻のようだ。この冷やかさのうしろは無言の軽蔑である。

どうだっていうの？　わたしにはこれが似合わないの？　月娟の胸は、この何年か服を買うとき、きまって感ずる気分と同様、むっとくる。やっと気に入ったのをみつけると、鎮海はかならず、「おまえこんなの着ても似合わないぞ、若すぎるよ！」と忠告するのだ。若すぎるのがなぜ悪いの？　ばあさんみたいだったらいいの？

いつも服は買えずに、むかむかして家に帰ってもまた一晩じゅうけんか。こんな保守派にぶつかったのが一生の不運だわ！

売り子を相手にする気はないわ。買い物するんだから、わたしが金を払って、あんたが品物をわたす、あんたにかまう権利があるの！　小娘に何がわかるの。もうすぐ文書が出ること知ってるの？　二十九の人がどうしてこれを着てはいけないの？　中国人は保守的なのよ。外国のおばあさんなんか、年をとるほどきれいにして、八十歳でも赤や緑の花やかなのを着るのよ。服はわたしが自分で着るのだから、あんた関係ないでしょ？　あんた冷たい顔してるけど、わたし、どうしても買うわよ！

全体がこうした調子の歯切れのいい現代北京語で書か

れていて、以前の作品にみられた暗さがないのに注意すべきであろう。開放政策は、文芸界にも、こういう形で影響を与えているのである。

オールド・ミスの問題も出てくる。文革のため、大学へ行くチャンスを失った世代の、勉強したい、大学へ行きたいという願いも現実の問題であり、一人っ子政策がとられて晩婚が奨励される一方で、オールド・ミスに対しては、憐れみ、皮肉、さげすみのまなざしが向けられるという古い体質も残している中国社会では、彼女たちはじっと耐えるしかないのだ。

十歳マイナスで、林素芬（リンスーフェン）は十九になったばかりだ。オールド・ミスのレッテルははがされた。つぼみがまさに開こうとする少女が、今さら労働組合のことなんかに気をつかう必要がある？　結婚紹介所に助けてもらう必要がある？　組合のダンスパーティで相手をさがす必要がある？　みんな放っといてちょうだいよ！

二十九歳のオールド・ミスは、どこへ行っても、我慢できない視線を投げかけられる。哀れみ、嫌味、説教、懐疑……孤独で助ける人もないのを哀れみ、望みが高すぎて一生独身だと皮肉られ、神経過敏で感情的だと説教され、ヒステリーで性格もかわっていると疑われる。ある日のお昼、彼女が湯わかし場で、インスタントラーメンにお湯をそそぎ、それに卵を二つ落としたら、もうしろでこんなことをいっている。

「まだこってり栄養つけるっていうの？」

「ちょっとおかしいのよ」

彼女は涙をのみこんだ。二十九歳の娘が昼に食堂へ行かずに、自分で二つ卵を落としただけで変わっていることになるの？　これはどの心理学の本で論じてるの？　親友の心配も、ちょっと話せばもう「いい人みつけて一緒に暮らしなさいよ」だ。二十九歳になっても嫁に行かないのは、まるで極悪非道の大罪を犯し、衆目の的となり、人のうわさの種にならねばならぬとでもいうようだ。お茶やご飯のあとのわずかなくつろぎのときにも、あれやこれやとみんなの舌の上でころがされて、心の安まるときもない。人間としてこの世に生まれたら、早く嫁に行くこと、早く男性をさがして一緒に暮らすこと以外にもっと重要で、もっと切実なことはほかにないとでもいうの？　哀しく、恨めしく、悩ましく、おかしいことだわ！……

大学を受けよう、絶対に大学に合格しよう。十九歳はちょうど大学に行く年齢、もういい加減にしていられない。通信教育でも夜間大学でも、うまくやれば卒業証書がものにできる。でも結局正規の大学じゃないけど、北京大学や清華大学にはとても手がとどかない。この一生がめちゃくちゃなのは、ちゃんとした勉強をしなかったからよ。厳密にいえば小学校程度、小学四年であの〝革命〟に出くわし、路地で何年かゴム輪跳びしてたら小学校卒業。中学へ行って教室に座っていても、飛行機に乗ってるようで、先生の教えてくれることも十のうち八、九はさっぱりわからず、ぼーっとしているうちに型どおり卒業。農村に住みついて、労働鍛練していて勉強したちょっぴりの知識も先生にかえしてしまった。〝革命〟が終わって町にもどって仕事待ち、さっぱり落着かない。どうやらこうやら役所の中の労働サービス会社にもぐりこんだが、これでも月給にありついたわけ。この帳簿、しめてみると暮らしの中で残ったのはあと一つのことだけ――相手をみつけて家庭をもち、子どもを生んで、おしめを洗い、油や塩やみそや酢や、食糧を買い、ガスを換え、けんか口論して、一巻の終り。……

このあと、退職者が十歳若返って職場に復帰してきた場合の混乱や、十歳に満たない子どもたちがマイナス十歳となればいったいどうすればいいのか、「いい知らせ」だと思ったものの、この政策はかならずしもすべての人にとって、明るい未来を約束するものでもなさそうだと人びとが気づきはじめることが書かれていく。結局、デマのもとになった公文書というのがどこにも見当たらず、みんなが大騒ぎでさがしまわるところでこの小説は終わるのだが。

文革の十年をとりもどすことができたらという人びとの切実な思いを中心にして、現代中国のかかえるさまざまの問題をリアルに描いたこの作品は、喜劇風の軽いタッチの会話がふんだんにもりこまれている一編のユーモア小説に仕立てあげられているものの、あの時代を経験した中国の人びとがこれを読んだときには、とても笑いとばすことはできず、いやでも昔のつらかった思い出を誘い出す、重くるしいドラマにもなり得る要素をもつものだったろう。しかし、こうした形であの「文革」をとりあげることができるようになったことは、中国文芸界の大きな変化を示すものである。しかもこの作品のテーマはさらに普遍的な問題――実際にはあり得ない希望を

いだき、夢を求めてあがく人間の姿をみごとに描き出すのにも成功したということができる。

四

中国で「文芸」というとき、それは文学・芸術の総称であるが、文学、演劇、映画からさまざまな民間芸術までを広く含めていうのが普通である。

一九七六年に、いわゆる「文革」が終わってから現在までの十年余りを、文学の方面では「新時期文学」と呼ぶ。文革後の新しい文学の方向を最初に示した作品は、七七年十一月に雑誌『人民文学』に発表された劉心武（リューシンウー）の短編小説「クラス担任」（原名「班主任」）であった。当時は文革の評価もまだ定まっていなかったが、不良少年をクラスへ受入れるかどうかをめぐって、文革期の教育のままに育てられたクラスの模範少女が教条主義的な考え方しかできぬ姿を描き、初めて「文革」を否定した作品として強い衝撃を与えた。

上海の復旦大学の学生盧新華（ルーシンホウ）の処女作「傷痕」は、『人民文学』に投稿したが送り返され、学内の掲示板に張り出したのが評判になって、上海の新聞『文滙報』に掲載（七八年八月十一日）された短編小説だが、社会主義中国の暗黒面をことさらに描いたとする批判も出て、激しい論争をひきおこした。このあと、堰を切ったように続々と文革期の悲劇を訴える作品が出て「傷痕文学」の名で呼ばれることになる。前述の諶容の『人、中年に到る』は、そうした数多くの作品と異なり、現実を凝視した深い内容をもつ作品として高い評価を受け、新時期文学は確かな歩みを開始する。作家たちは、今まで言いたくても言えなかったことを勇敢に発言し始める。政府の方針どおりのスローガンを叫ぶのではなく、幸せを求める人びとの声、人間らしく生きられる願いを、作品に結晶させていく。

もちろん、そうした文芸の自由化に反対し、それをおさえようとする動きもあった。八三年十一月から始まった「精神汚染を除去しよう」というキャンペーンもその一つであったが、八六年十二月から全国各地でおこった大学生のデモは、胡耀邦（フーヤオバン）の総書記辞任にまで発展した。[4] しかし、その騒ぎも今では沈静化し、その折処分された人びとも復活してきている。

中国映画界の〝新しい波〟を世界に示したのは、八五年のロカルノ映画祭で銀賞をとった「黄色い大地」（原

名「黄土地」）であった。八四年の広西映画製作所の製作で若手監督の陳凱歌（チェンカイゴ）の処女作品。荒涼とした黄土高原に生きる寡黙な少女の哀しい運命の物語だが、撮影の張（チャン）芸謀（イーモウ）の創造的な映像美は、従来の中国映画には見られぬもので、国内でも第五回金鶏賞優秀撮影賞をうけた。

八七年に第二回東京国際映画祭でグランプリを受賞した「古井戸」（原名「老井」）は、鄭義（チョンイー）の同名の中編小説（『当代』八五年第二期に掲載）の映画化で、脚本も鄭義が担当、西安映画製作所による八七年の作品。山西省太行山中にある水のない村を舞台に、先祖代々、井戸掘りに挑戦してきた村人の生きざまを描く。監督は三九年生まれの呉天明（ウーティエンミン）、撮影は「黄色い大地」と同じ張芸謀だが、彼は「古井戸」の主演男優でもある。

西安映画製作所は中国でのヌーベル・バーグ（新しい波）の中心で、八七年に黄建新（ホワンチェンシン）の監督で製作された「スタンド・イン」（原名「錯位」）は、つまらぬ会議の連続で、科学技術研究の時間をとられる局長が、自分とそっくりのロボットを完成して、それにスタンド・イン（代役）をさせるというストーリイで、会議に明けくれて、具体的な問題の解決がいっこうに進まない中国の現状に対する鋭い諷刺であるとともに、機械が逆に人間を支配し始める危険を訴えるもので、大胆に新しい映画手法をとり入れた点も注目された。

広西映画製作所の八五年の作品「大閲兵」も、第十一回モントリオール国際映画祭で審査員特別賞を受けた。この作品も監督は陳凱歌、撮影は張芸謀である。八四年十月一日の建国三十五周年を祝う天安門広場での大閲兵式に参加する兵士たちが、わずか九十六歩、一分にもみたぬ行進のために、選ばれて集団訓練を受ける状況を克明にえがき出す。最高の名誉と喜んで参加した兵士たちの心は、やがてさまざまにゆれ動く。機械のようにそろう行進の美しい映像は、しかし、軍隊の訓練なるものの非人間性までも同時に鋭くえぐり出していた。

演劇の方面でも、いろいろ新しい動きが出ているようだ。イプセンの「ペール・ギュント」、オニールの「地平線の彼方」、モリエールの「タルチュフ」、マルセル・パニョルの「トパーズ」、フッサールの「ペンキ塗り立て」やブレヒトの作品など、外国の古典的作品から現代の新しい作品までが、中国各地の演劇学校や新劇劇団によって上演されたのも、ここ数年来の出来ごとであった。

日本の演劇では、森本薫作の「女の一生」をいくつか

の劇団でとりあげて上演している。八六年には第一回シェークスピア劇祭が上海で開催されたが、そのままの翻訳によるもののほか、京劇や昆劇、越劇といった伝統劇の形式によるシェークスピア劇も上演されたという。

八六年の秋に、わたしは湖南省の益陽という町で、花鼓戯（クーシー）と呼ばれる湖南の地方劇をみたが、伝統劇の形式を踏襲しながら、舞台装置も内容もまったく現代の新しいものになっているのに驚いたことがある。

戯曲「セールスマンの死」の作者アーサー・ミラーが八三年春、北京の首都劇場に招かれて中国を訪ねた。この作品を中国の俳優で上演することになり、その演出を依頼されたためであった。北京に到着してから、初日の幕をあけるまでの三か月間の手記 "SALESMAN IN BEIJING" は、『北京のセールスマン』という題で日本語訳も出版されている。(5) 異なった文化をもつ二つの国の演出家と俳優とが、どのようにして劇中人物の動きとセリフを一つ一つ、うそでないものにするために格闘したかを生き生きと伝えるすばらしい実験の記録となっている。文化革命のときに俳優がいかに痛めつけられたかを聞いたミラーは、この書物のあちらこちらにその事実を書きとめている。

毛沢東の妻、江青とその取り巻き連中は、首都劇場の公演活動を停止させ、演出家や劇作家、俳優たちは農村に送られて、豚を飼ったり、畑しごとをさせられたりして何年も舞台から遠ざけられていた。その間、この劇場ではずっと京劇の俳優たちが、いわれるままにいわゆる「八つの革命模範劇」をくり返し上演していた。

有名な劇作家曹禺（ツァオユイ）は、文革当時六十歳代で首都劇場の主席だったが、紅衛兵によって事務所から引きずりだされ、四年間門番をやらされた。自動車を劇場に隣接する小路に誘導するのが仕事だった。(6) 老舎（ラオシェー）は六十代半ばすぎだったが、首都劇場の隣りの中庭で文化関係の各部門で働く人や俳優や作家たち四十人ほどの人と一緒に紅衛兵にとり囲まれた。その夜、紅衛兵らは老舎を一団から引きずりだし、彼の生き方や戯曲を唾棄すべきブルジョワ主義だと難癖をつけ、その言辞や性格を嘲弄し、あげくの果てにいきりたって暴行をくわえようとしたのを一人の警官がなんとか救いだし、その夜おそくに家にかえした。翌朝、北海公園近くの池に、老舎は死体となってただよっていた。(7)

アーサー・ミラーは次のように述べている。

そこで判らなくなるのは、文化革命のような非道さがどうしてこの国を席捲しえたかということである。その眼目の一つは大衆の面前でプロレタリア的忠誠を誓わせ、労働者の利益に反した過去の罪を懺悔することであったはずなのに。結果は何万人もの人がスタディアムに集められ、最もすぐれた知識人や政治家たちを目の前にして、いたましい侮辱をくわえて楽しんだのである。あの高名な文学者巴金までが、スタディアムをうめつくした喚き叫ぶ野次馬の前で三角帽子をかぶらされ、砕いたガラスの上にひざまずかされたのである。(8)

ともかく、こうした「文革」の暗黒の時期をのりこえ、文芸界全般に明るい希望が生まれ、新劇の方面でも、外国の新しい手法をとり入れ、時間や空間の処理にも大胆な転換を用いるなどいろいろな試みがなされているが、これが全国的な規模で定着するには、まだかなりの時間を必要とするであろう。前述の映画「古井戸」のなかで、山西省の山村に回ってくる盲人の一座に、エロチックな歌をうたえと要求し、大喜びで合いの手を入れているシーンがあったが、中国はあまりにも広く、都会といなかとの格差は、日本で想像できぬほど大きい。こうした地方には、伝統的な地方劇や大衆演芸は受け入れられても、新劇はまだ人びとの共感をえるところまで来ていないのが現実であろう。全国的規模の演劇祭も各地で開かれるようになり、経済改革の問題、結婚難や住宅問題など、現代のきびしい社会問題をとりあげているものも、「マイナス十歳」にみられるような喜劇風な味つけをしているものが多く、問題を正面からみようとしない傾向があると指摘されるのも、こうした現状の反映とみることができる。演劇でまで解決できそうもない問題をつきつけられたり、説教されたりするのはごめんだという観客の意識や、せめて楽しい夢でもみたいという要求にこたえて、音楽や踊りなどもはいったショー形式のものもふえているという。文革から十年あまりたった中国文芸界は今、転機を迎え、新しい方向を模索しているのであろう。

（一九八八、七、一八）

注

（1）「ベルリン未来賞」はイタリア賞とならんで世界的なテレビ・ラジオ番組のコンクールで、二年に一回開かれ、八七年度は五十余か国の参加があった。中国が世界のラジオドラマ・コンクールで賞をとったのは、

これが最初である。

（2）いわゆる「林彪・江青反革命集団事件」を裁く「中華人民共和国最高人民法院特別法廷」は八〇年十一月二十日開廷、八一年一月二十五日に判決。その後、八一年六月二十七日、党第十一期中央委員会第六回総会（六中全会）は「歴史決議」を採択したが、その中の「「文化大革命」の十年」では「一九六六年五月から一九七六年十月にいたる「文化大革命」によって、党と国家と人民は建国以来最大の挫折と損失をこうむった」とし、「歴史がすでに明らかにしているように、「文化大革命」は、指導者がまちがって引き起こし、それが反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である」と文革を全面的に否定した。（安藤正士・太田勝洪・辻康吾『文化大革命と現代中国』岩波新書一八〇―一八一ページによる）

（3）『中国文学家辞典』現代第三分冊、四川文芸出版社、八五年三月刊による。

（4）安徽省の科学技術大学から始まったこの時期のデモは、八七年一月に同大学副学長方励之の党除名処分という結果を招いたが、同時に、かねてから文芸自由化の主張でにらまれていた文芸評論家の王若望、ルポルタージュ作家で『人民文学』編集長の劉心武も党除名処分を受けた。

（5）アーサー・ミラー著、倉橋健訳『北京のセールスマン』一九八七年十一月初版、早川書房。

「彼は一九八三年の春、妻で写真家のインゲと娘のレベッカをともない北京に行き、稽古始めの三月二十一日から初日の五月七日まで四十八日間にわたり、自作「セールスマンの死」の演出と指導にあたった。そのときの日記をまとめたものが『北京のセールスマン』である。しかしこれは単なる稽古場日記ではない。異った文化的土壌のなかで自分の作品をあるべきかたちで形象化しようと、試行錯誤をかさねながら中国の演劇人に接する真摯な演出家の姿とともに、中国の社会や民衆の生活、あるいは文化革命後の知識人の生きかたに注がれた温かいが鋭い作家の目が感じられる。」（同書、訳者あとがき）

（6）『北京のセールスマン』一八四～一八五ページ。

（7）同右。一八六～一八七ページ。

（8）同右。六八ページ。